

所 陵

ISSNO 0913-1906

No.20

関西大学考古学等資料室彙報

平成元年11月1日発行



銅鐸（大阪府四条畷市出土）

目 次

開設35周年考古学資料室の思い出	
ー浜田・末永考古学の伝統ー……………	2
関西大学創立100周年記念事業ー日・印共同学術調査の成果(総括)ー……………	4
エジプト学者の来日……………	6
明清時代北京の倉庫……………	8
大和における弥生時代の青銅器の実態について……………	10
出土人形の系譜……………	12
資料室学内公開15周年回顧……………	14

関西大学考古学等資料室
〒564 大阪府吹田市山手町3丁目3の35
Tel 06-388-1121 (内線3341)

開設35周年考古学資料室の思い出

— 浜田・末永考古学の伝統 — 横田 健 —

昭和28年6月の半ばすぎのことであった。末永雅雄先生から、「本山コレクションを大学に買って貰うように申請したところ、理事会の人たちが浜寺の本山邸へ下見に行き、良ければ買うといっている。君もひとつ立会人として行ってくれないか」とお話があった。理事会は昭和27年の10月に改選され、それまでの宮島綱男理事長、春原源太郎専務理事に代って、白川朋吉理事長、久井忠雄専務理事らのメンバーになっていた。

その頃は7月1日から夏休みに入っていたが、7月4日に本山邸に行くことに決まった。まだ梅雨があがらず曇り空の午後、白川理事長ほか数名の理事が参加された。メンバーの名前は覚えていないが、理事以外に評議員の重だった方も少数参加されていたらしい。というのは弁護士で商法の講師をされていた西本寛一法学博士のことを思い出すのである。西本さんはタクシーが本山邸につくや否や、よほど小便を我慢しておられたらしく、門柱のところに立小便をされた。白昼に大邸宅の門柱に放尿とは、アッと驚いた。見学については、当時、私の作った和歌があるので記そう。

浜寺の荒れし大^{はにし}き家に土師らが
手わざ見むとて訪ひしつゆの日

うつろなる埴輪の目こそさびしけれ
つゆの日 傾^{かたむ}きしやしき訪ひきて

うつくしき人らも遊びけむサロンなれど
うつろなる埴輪のみたたずむ雨の日

富みし人も老いくづをれて荒れはてし
邸に守りきし埴輪売るといふ

浜松も雨に煙れる午後なれや
破れしサロンに埴輪かなしむ

見学が終ると白川理事長は一同を堺大浜の大きな料亭に案内して御馳走して下さいました。よく

ふとった老女将と白川さんは、かなりきわどい冗談を飛ばして大変ご機嫌であった。後に岩崎学長に報告に行った時に、その話をすると、学長は小指を立てて「あの人は白川さんのコレじゃ」といわれた。

理事会は本山コレクション購入を決議したが、宮島理事のみは反対だったとは、後に久井理事から聞いたところである。白川理事長は明治時代から日本画の蒐集に熱心で、弁護士の収入の3分の1を宛てていたと私に語られた。そのコレクションを大阪市に寄贈し、大阪市の名誉市民第一号になられた方で、購入に理解があった。本山コレクションは翌29年の春に関大へ搬入された。考古学の研究室は、旧図書館の3階の階段を上ったすぐかかりの室にあったが、コレクションが入ると、それに続く、3階南側全部が陳列室に宛てられた。

末永先生は研究室の南側の窓際の席に坐られ出入りする学生たちに、よく話しかけ、指導され、その話は学問上のことのみでなく、行儀作法に至るまで、懇切に指導された。昭和34～35年頃から陳列室の管理をする人を嘱託する予算がついて、千里山に住む良いところの奥さんが通って来られ、美しい人だと評判であった。

私は日本人類学会、民族学会連合大会に毎年出席していたが、ある時、大阪大学の東洋史の助教授山田信夫氏（中央アジア史専攻、後に教授62年逝去）とあって話をしていると、突然「僕の家内は関大であんたの日本史概説を聴講してるんやで」といわれたので、驚いて聞かえすと「僕の家内は末永先生の考古学研究室へ勤めてるんや」との返事であった。それであの美しい奥さんは山田信夫氏の夫人多恵子さんであることが分った。この夫人は東大の東洋史出身で夭折した英才前田直典氏（『元朝史の研究』という論文集の他、「応神天皇の時代」「オリエンタリカ」所載で日本史でも有名）の妹さんである。この嘱託のポストは、昭和41年に故藤井祐介君が大学院を卒業すると、藤井君に譲られた。

考古学資料室は昭和49年に現在の大学院学舎

の4階に移転したが、それ以後のことは、ここでは省略する。(14ページ以降参照)

末永先生は、師浜田耕作先生が京都大学に早く陳列館を設けられ、学生に対して実物を手にとらせて教授された方法を学んで、資料室を設置しようとされたのであろう。

浜田先生は明治40年に京大助教授となられたが、大正2年3月に欧州留学を命ぜられ、イギリスに赴き、大正5年3月に帰朝されるまで3年間、ロンドンとオックスフォードで研究された。ロンドンではエジプト考古学の大家フリンダース・ペトリにつき、オックスフォードではエジプトや中東考古学のセイスにつかれた。ロンドン大学の傍には世界最大の博物館ブリティッシュ・ミュージアムがあり、オックスフォードにはアシュモLEAN・ミュージアムがあり、ヨーロッパ考古学については各地の出土品をよく集めてある。ここには民族学関係のピット・リーヴァーズ・ミュージアムもある。

浜田先生はこれらを見て陳列館の必要を痛感されたのであろう。また考古学調査報告を出版する必要を感じられたのであろう。

大正5年に帰国された直後に、河内の国府に大きな縄文遺跡が発見され、毎日新聞社長の本山彦一氏が、これに大きな関心を持ち、発掘費用を出し、出土品を自邸に蒐集し置かれた。そして学術上の発掘、調査、整理や報告書の執筆を浜田先生に依頼された。

京大考古学研究報告の第2冊は『河内国府石器時代遺跡発掘報告』と題して他の2篇の報告と共に大正7年に出版されている。

同第4冊にも国府の報告が刊行されているが、この執筆は浜田先生と辰馬悦蔵の連名となっている。故辰馬氏は大正7年の京大卒業生であるが、銅鐸蒐集と辰馬考古博物館の創設で有名である。なお、第4冊には鈴木文太郎の「河内国府・肥後轟等にて発掘せる人骨に就て報じ併せて石器時代の住民に及ぶ」が併載されている。

末永先生が本学に就任早々行われた北玉山の発掘や川西市加茂弥生遺跡等の報告をすぐに出版され、また隠岐調査の報告も大冊のため刊行は少し遅れたが、昭和43年に出版されているのは浜田先生のひそみに習われたものであろう。

本山邸に蒐集された出土品は、本山氏が神田孝平氏のコレクションとあわせ、本山コレク

ションとして有名となった。本山氏は元来農業技術史の研究に志を持ち、自邸内に農業博物館を設け、農業研究資料を集められたのであった。そして蒐集品の目録を作るべく、浜田先生に人選を依頼された。浜田先生がここに推薦された人が末永先生で、昭和5年のことである。末永先生はその頃から吉野宮滝の発掘調査を行うかたわら、昭和11年に日本学士院賞を受賞された大著『日本上代の甲冑』の資料蒐集執筆、『宮滝の遺跡』の報告執筆とあわせて、『本山考古室目録』を作製されたのであるから、まさに超人的な仕事をされたわけである。本山氏は昭和7年になくなったが、考古室の目録はその翌年に完成、出版されたという。



浜田耕作先生

こうして本山コレクションの由来をたずねると、浜田先生から末永先生へと学問伝統が引きつがれていることがよく分る。学生をフィールドにおいて、また研究室や資料室において、懇切に指導されることもそうである。浜田先生は午後3時頃のお茶の時間に茶菓を学生や他の教授方と共にし議論を楽しまれた。世人呼んで「カフェ・ダルケオロギー」と。末永先生もよく菓子や果物を買って来させて、学生にふるまわれ、学生との会話をしむうちに、学生を指導された。関大の考古学研究室出身者のみならず、他大学でも末永先生の指導された大学の出身者が近畿各府県はもとより、九州方面までも活躍しているのを見るとき、浜田・末永考古学の伝統の偉大さを痛感する。末永先生が昨年11月文化勲賞を受賞されたのも偶然ではない。長い間に伝統がはぐくんで来られた学問と教育が豊かにみのりを結んだといえよう。同志社大学では一般教養科目に考古学を置いているという。関西大学でも考古学を教養科目に置けないものだろうか。考古学は興味深い学問である。法学部や経済学部、また工学部のような学部の学生でも興味を持つであろう。あえて提案したい。

〔前委員長・関西大学名誉教授〕

関西大学創立100周年記念事業 日・印共同学術調査の成果（総括）

網 干 善 教

関西大学創立100周年記念事業として、関西大学とインド国政府（考古調査局）との共同による祇園精舎跡の3次にわたる発掘調査は1989年3月をもって終了した。その間の調査の結果や成果の概要については逐次本誌に記載してきた。（『阡陵』No.14、15、17、18、19）

それを要約する意味において、ここに総括的に発掘調査をまとめておきたい。ただし、現在持ち帰った莫大な資料の整理を行いつつあり、同時に科学的な分析を各研究機関に依頼してあって、その結果によっては見解の一部修正する必要があるかも知れない。正式調査報告書は3年後に刊行する予定であるから、もし本文と正式報告書に相違があれば、その時点で報告書によられたい。

Aエリア（西北地区）

- ① A地区では沐浴池のほぼ全容を知ること



第1次調査区（1986-1987） 第2次調査区（1987-1988） 第3次調査区（1988-1989）

（祇園精舎跡）地形測量図及び発掘位置図



A地区で検出した沐浴池跡

が出来た。この沐浴池はクシャーン朝に構築され、その後改修が加えられているが、一時的な出水のために一部崩壊し、機能を失ったと思われる。

- ② 沐浴池の規模は、上段下方は東西26.44m、南北24.37m、下段上面は東西24.26m、南北21.92mである。
- ③ 階段は東、西各辺には中央に各1ヶ所、南、北各辺には各2ヶ所に設けられている。

Bエリア（西北地区）

- ① 沐浴池に東接して大規模なストゥーパとそれをめぐる僧院の遺構を検出した。
- ② ストゥーパの建立以前、クシャーン朝期の僧院らしき構造物があった。
- ③ グプタ朝期になってここにストゥーパが建立され、それをめぐって四方に僧院が作られた。ただし、僧院は度々の崩壊・改修・修復が認められる。
- ④ ストゥーパの基壇の規模は東辺19.55m、南辺20.02m、西辺19.61m、北辺19.88m、内部の方形区画は東西10.81m、南北10.47mである。
- ⑤ 基壇の中央に1辺約10mの低い

方形壇があり、それに内接して円形の煉瓦敷がある。これは三重に回る。

- ⑥ 基壇上の構造物は数回にわたって改修されているが、最後は木造の部分が焼失した状況である。
- ⑦ ストウパの中心部には、舍利埋納の痕跡は認められない。

Cエリア（北地区）

- ① 遺跡地最北端、寺院No 1の東側で試掘した。
- ② 地表下1.8mのところで、グプタもしくはポスト・グプタ期の建物のあったことが判明した。

Dエリア（東地区）

- ① 東地区は2ヶ所試掘した。
- ② グプタ朝期からポスト・グプタ期の大甕を据えた貯蔵施設を検出した。

Eエリア（南地区）

- ① 第1次調査で発掘し、第2次調査で主に土器の編年を目的とした層位確認を行った。
- ② 第1次調査ではポスト・グプタ期以後の建物であることを確認した。
- ③ 第2次調査では2ヶ所において地山層まで掘った。その深さは地表下約7mである。その間の遺物を層位的に調べる作業を行った。良好な資料を得たので第3次調査に並行して土器の実測を行った。
- ④ 測量原点の東南約50mの地点で1ヶ所トレンチを設け発掘したところ、ポスト・グ



沐浴池から出土した佛頭



沐浴池スロープ

グプタ期と思われる弧状を呈する建物跡があることが判明した。

Eエリア（西地区）

- ① 地表下約2m、当時の地表面に直径約6mの円形状の煉瓦敷遺構があり、その中央に内径約2m、深さ5mで湧水に達する井戸を検出した。時期はグプタ期で、僧院で使用されていたものと推定できる。
- ② 西地区西端ではクシャーン朝及びグプタ期、ポスト・グプタ期に至る寺院・僧院跡を検出した。

Gエリア（中央地区）

- ① 小規模な奉献塔群と煉瓦敷床面、それらを取り囲む隔壁・僧院からなる遺構があり、クシャーン朝後期からポスト・グプタ期におよぶ。
- ② 沐浴池を検出した。これは東西約40m、東北約25mの長方形で、構造的にはA地区の沐浴池に類似すると思う。
- ③ 周辺には寺院・僧院群があり、これらはクシャーン朝より中世まで、数回にわたり改修が行われている。
- ④ 沐浴池の南側にも、煉瓦敷面床につづいて小規模な奉献塔・建物群がある。

出土遺物の整理と実測

- ① 出土遺物は総数1,356点である。
- ② 土器は極めて多量に出土したが、そのうち約2,000点を実測した。
- ③ 土器の時期は紀元前後からのもので、今後資料の整理がすすむことによって時期的な変遷の様相を知ることが出来ると思える。

エジプト学者の来日

加 藤 一 朗

本小稿は去る5月来日されたオックスフォード大学のエジプト学者、ペインズ教授 (Dr. John Robert Baines, 1946年生れ) の紹介である。

近年わが国においてもエジプト学を志さすものがふえていて、その数は30名をこえていよう。しかし、エジプト学が正式の講座として置かれている大学がないこともあって、海外の一線級のエジプト学者の来日はまれである。筆者の知る限りでは、1983年来日されたフランスのJ. ルクラン教授とポーランドのK. ミスリーヴィッツ教授につづいて3人目である。ルクラン・ミスリーヴィッツ両教授については、当『汗陵』の第8号の中に「二人のエジプト学者」という題で紹介してあるので参照されたい。

さてペインズ教授は見るからにエネルギーに満ちたシャープな感じの方で、その研究は多岐であり、古代エジプトの歴史の各時代にわたっているだけでなく、言語・宗教・美術の研究を含めるエジプト学の全分野を網羅したものである。サッカラとアピドスで発掘・調査を行ない、発表した論文は50をこえる。文法・文献学者ガーディナー (Sir Alan Gardiner) やピラミッド学者エドワーズ (I. E. S. Edwards) 亡きあと、現在イギリスのエジプト学界を背負っ

てたつ1人といって宜しいであろう。日本滞在は約2週間であったが、東京・名古屋・伊勢・京都・奈良を訪れ、この間に4回の講演 (題名は「古代エジプトにおける王権」、「古代エジプトの神殿」、「中王国時代の彫刻」、再び「古代エジプトの神殿」、いずれもスライド使用) を行った。幸いにして筆者は、京都において2日間にわたり教授と行を共にし、エジプト学の万般について個人的に話し合う機会をえた。教授が来日中もっとも関心をもったのは京大博覧館のエジプト資料の展示であった。将来の研究のためということで、ここでは展示品の多くを写真撮影し、展示品の英文説明の誤りを正したりしたが、ここで1つのエピソードが生まれた。つまり、ビーズを編んだ装身具を一目見て「この編み方はエジプトのものではない」といいたことである。この見学に立合っていた小野山節京大教授によると、「実はこの装身具は一度糸が切れてバラバラになってしまったのを、われわれの手で、編みやすいようにつないでおいいたのです」ということであった。ペインズ教授の炯眼に敬服した次第であった。

さて筆者が教授と種々議論したこと的一端をここに書きとめておきたい。断片的な叙述になるが。

1. ヒエログリフの研究法について。ヒエログリフを学生に教える場合、筆者はずっとガーディナーの文典をテキストとして来た。これは長くエジプト学のバイブルとよばれてきたほどのものである。ところが最近ガーディナーはもう古いというエジプト研究者が現われてきた。この点筆者はとまどっていたので、教授の意向をたしかめた。教授からは「たしかに動詞に関しては、H. J. ポロツキーやJ. チェルニーの説に耳をかたむけなければならないが、彼らの研究はまだ体系的な書物として刊行されていないので、ヒエログリフ全般の入門書としてはやはりガーディナーの文典によるほかない」という答えが返って来た。そこで筆者は、少くとも当分の間は、初心者にガーディナーの文典をすすめて宜しいのだという認識を新たにした。



ペインズ教授 (オックスフォード大学)

2. ファラオ（王）の神性について。筆者はかねがね、古代エジプトではファラオが単に政治的支配者であるばかりでなく、あらゆることの中心、たとえば文化の光源でさえあると考えてきたが、教授によれば、「ファラオはエジプト社会のセントラル・インスティテューション（制度的中心？）である。国家は王権なしには考えられなかった。王は神がみよりも重要であった」ということであった。この点2人の意見は完全に一致した。そしてまた、God-King（神王）としての支配者の性格はエジプトのファラオとわが国の天皇にもっとも端的に表明されていると考えられるわけで、教授が短い滞在の間に伊勢神宮に参拝したのも、このような思いがけにあってのことと思われる。教授の頭の中では、エジプトの初期の、恐らくは木造であった神殿と伊勢神宮とが比較されていたにちがいない。

3. 「神」を表わすヒエログリフについて。小さな問題点であるが、ゲルゼ期（先史時代末期）の装飾土器の図柄によく見られる船の、2本のリボンをつけたマストが、歴史時代のヒエログリフのネチュル（神）を表わす文字の前身であるということでは、教授と筆者の意見が一致した。これは心強いことであった。というのも、異説がないわけではないのであるが、筆者はつねづね「ネチュルの起源はリボンのついた船のマスト」という風に学生諸君に教えてきたので。

4. ナルメル王の石パレット（写真）について。わが国の場合、邪馬台国論争などに見られるように、日本国家の起源については、未詳の部分が多い。それが、古代エジプト王国の出発点に関しては、私見では、非常にはっきりしている。ヒエラコンポリス出土のナルメル王の石パレットが、あまりにも明白に統一王国の成立を物語っているように思われるからである。ナルメル王の石パレットは、——碑文的というよりもむしろ絵画的にはあるが——その裏の面では、上エジプト出身のナルメル王が、上エジプト王としての冠（白冠）をつけて、下エジプト人を討伐している姿で描かれている。そして表の面では、すでに下エジプトを征服しおえた同王が、下エジプト王としての冠（赤冠）をつけて凱旋式を行なっている。ここに——前3100年ごろの



ナルメル王の石パレット（左表）（右裏）
高さ 約90cm

ことであるが、——上・下エジプトの統一はなり、世界に先がけて統一王国が成立し、初代のファラオが出現したものと考えられるのである。それほどこの石パレットの印象は強烈で、筆者はこの石パレットを「建国の碑銘」として学生諸君に紹介して来た。この点において、ペインズ教授の発言は微妙なところで、筆者の見解と異っていた。つまり、赤冠の形象はすでにゲルゼ期に先立つアムラ期に現われていること、いいかえるなら、王権の起源はそこまでさかのぼって考えられること。ゲルゼ期には、少なくとも文化的にはエジプト全土にわたって統一性が看取されること。このころのものとされるヒエラコンポリス出土の壁画やゲベル=エル=アラク出土のナイフの柄に見られる戦闘の図は統一戦争を表わしていること。等々の考古学的証左から、教授は、ナルメル王は第1王期の初代の王というよりも、その前のものと推定される0王朝の最後の王と見るべきで、石パレットの「征服の図」は「同王の先祖の王たちが描いた同様の図柄をそのまま模倣したものである」と主張した。「そして、その様な模倣はエジプトではしばしば見られるものである」ということであった。実は筆者自身、かつて『古代エジプト形成期の一側面』（足利惇氏博士喜寿記念オリエント学インド学論集、1978、の中）という小論で、先史時代の諸石パレットに見られるライオン、雄牛の姿が王権のシンボルであると指摘したのであったが、ナルメル王の石パレットの図柄が前代のものの模倣であるという推論は思ってもみなかったことであった。

明清時代北京の倉庫

松 浦 章

元代以降、明初を除き北京が中国の首都となったが、この北京へ江南方面から税糧として運ばれてきた米を初めとする穀物類はどこに貯蔵されていたのであろうか。この分野の研究は余り進展していない。〔1〕しかし、清代以来の貯蔵倉庫が現在なお北京に存在している。それらの一部は今も堅固であり倉庫としての機能を充分に有している。1988年8月この倉庫群の一角、旧＜南新倉＞（写真①）を參觀する機会を得たのでここに紹介してみたい。

I 明清時代の北京の倉庫

正徳『大明会典』巻39、によれば、明代の倉庫による備蓄は、「およそ、天下に倉廩を設置し、其れ各該衛所にあつては、常に二年の糧斛を存す」と記しているように、2年分の食糧を貯蔵しておくことにあつた。

明代の制度に詳しい孫承澤の『春明夢餘録』巻37、倉場に、江南方面から大運河によって北京近郊の通州に輸送された税糧は、通州と北京とに分割して貯蔵されたことを記している。北京で貯蔵されたのは舊太、百萬、南新、北新、海運、禄米、新太、廣備倉の8倉庫群であつた。

これら北京の8倉庫群全体の倉庫の総数は『明史』食貨志3に「京倉五十有六」とあるから、全部で56倉庫あつたことが判る。

しかし、清代にはその数は急増している。『清史稿』食貨志2、倉庫によれば、「京師および各直省皆倉庫有り。倉、京師十有五あり。戸部及び内務府にある者、内倉といい、恩豊という」とあつて、その他に、禄米、南新、舊太、富新、興平、海運、北新、太平、本裕、萬安、儲濟、裕豊、豊益倉等計15の倉庫群があつた。

これらの各倉庫群の倉庫数とその所在地の清末の状況については光緒『順天府志』巻10に詳しい。

禄米倉は57倉を計う、朝陽門内南小街にあり。

南新倉は77倉を計う、朝陽門内北小街にあり。

舊太倉は83倉を計う、朝陽門内北小街

焼酒胡同にあり。

海運倉は100倉を計う、東直門内南小街宋姑娘胡同にあり。

北新倉は85倉を計う、東直門内南小街瓦盆胡同にあり。

富新倉は64倉を計う、東直門内四牌楼七条胡同にあり。

興平倉は81倉を計う、東直門内四牌楼十一条胡同にあり。

太平倉は86倉を計う、朝陽門外南城牆根にあり。

これらの8倉庫群は全て皇城の東側に集中していた。さらに、同書に、

恩豊倉は12倉を計う、東華門内にあり。

内倉は20倉を計う、紫禁城の城垣にあり。

祐豊倉は63倉を計う、東便門外にあり。

儲濟倉は108倉を計う、東便門外北城牆根にあり。

萬安倉は40倉を計う、朝陽門外北城牆根にあり。

本祐倉は30倉を計う、德勝門外清河にあり。

豊益倉は30倉を計う、德勝門外安河橋にあり。

以上の倉庫群合計15個所で全935倉庫にのぼる。さらに通州の倉庫を含めると1157倉庫に対して、漕運によってもたらされる穀物は1年に430余万石に達している（同書）。

北京に赴いた朝鮮使節の金景善は『燕轅直指』巻4、太倉記の中で「東華門よりして北のかた神武門を経て西華門に至るまで、背は禁城を負い、濠水に面し、長廓となるはすなわち太倉なり。（中略）使行五日ごとに支供の米もまた此より出ると云う」と紫禁城の周囲に、まるで長大な廓下の如くある内倉の状況を記している。



① 旧・南新倉



② 旧南新倉壁面（北面）



③ 旧南新倉の現構内

II 倉庫の規模

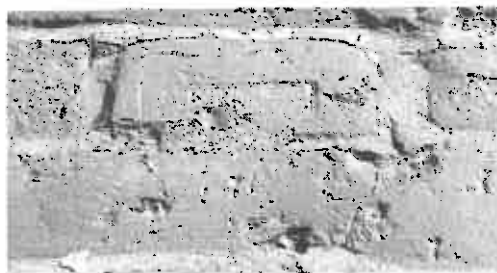
北京と通州の倉庫に貯蔵された税糧を搬出した地方に関して光緒『順天府志』巻10によれば、山東、河南省から粟、麦、豆。江蘇、安徽省から稷、秈、稷、粟。蘇州、松江府下から白稷、糯、米。浙江省から白稷、秈、糯米、米。江西、湖北、湖南省から稷、正米と盛京省からの粟、豆等であった。これらの税糧はほとんど長江中下流域と大運河に隣接する地域の穀物類であった。北京にもたらされた税糧は京官の俸米と内倉のは宮廷や宦官等の食糧用に使用された。^{〔2〕}

北京に輸送された税糧は各倉庫群によって貯蔵穀物の内容が分られていた。同治『欽定戸部則例』巻15、倉廩1によれば、宮廷内で使用する穀物を貯蔵した内倉は白米を中心に全種類の穀物が貯蔵された。儲濟、萬安、舊太、海運倉では主に黒豆が貯蔵された。禄米、南新、舊太、海運、北新、富新、興平、萬安、祐豊の10倉庫群では主に麦石が貯蔵された。これら莫大な麦石は唐代以降の中国で発達した粉食の主要素材となっていたことは想像に難くない。

各倉庫の規模は順治（1644～1661）初年の規定によれば、「每倉以五間爲一廩、每間七椽・六椽、闊一丈四尺、深五丈三尺、山柱高二丈二尺五寸、檐柱高一丈五尺五寸」^{〔3〕}とある。五間、30尺約9.6mを基準に一倉庫を建築している。6尺ごとに7本の梁と6本の垂木が用いら



④ 旧南新倉内部



⑤ 旧南新倉外壁煉瓦

れ、広さ1丈4尺約4.5m、奥行き5丈3尺約17m。大黒柱の高さ2丈2尺5寸約7.2m、軒柱高さ1丈5尺5寸約5mの規模であった。

構造上の特色として、「每廩頂各開氣樓一座、廩底甃砌、上鋪木板、廩門及牆下、均開竅穴、以洩地氣」^{〔4〕}とあり、各倉庫に空気穴と言うべきものが1箇所設けられ、床は全て煉瓦で敷き詰め、天井は木板であり、入口や支柱の基底部には地気を漏らす工夫がされていた。

III 現代の南新倉

北京市社会科学院歴史研究所の閻崇年氏と中国社会科学院歴史研究所の馮佐哲氏の案内にて参観したのは旧＜南新倉＞であった。現在これらは北京市百貨会社の倉庫として使用されている（写真②～④）。

萬曆『大明会典』巻21、倉廩1によれば、南新倉が設置されたのは永樂7年（1409）のことである。現存倉庫の壁は数十cmに及ぶ厚みがあり、それらは焼成された煉瓦で造られている。外壁部分の煉瓦の中に「遵欽憲太亭城磚」（写真⑤）やまた、「新梯振磚」と印刻し焼成された物が僅かに見られる。これらの煉瓦はおそらく北京の近郊で焼成されたものと思われる。

清代歴史遺物の参観の機会を与えられた両氏に末筆ながら謝意を表したい。

〔註〕〔1〕 星斌夫氏が臨清、徳州の貯蔵倉庫について研究されている（『明代漕運の研究』1963年）が、北京の倉庫に関しては殆ど研究されていない。中国では馮佐哲氏「元、明、清時期的京通粮倉」（『史苑』第1輯、北京市社会科学研究所、1982.12）が管見の唯一のものである。なお、安藤更生氏編輯『北京案内記』（1941年）に「禄米倉址」（86～87項）として簡略ながら概要が記されている。

〔2〕 『天咫偶聞』巻3、東城。〔3〕〔4〕 光緒『大清会典事例』巻871、工部、倉廩。

大和における弥生時代の青銅器の実態について

久野邦雄

近年大和においても急速な開発に伴う発掘調査が増加し、中でも弥生時代の青銅器を研究する上においての新たな新発見がわずかながら増えつつあることは注目に値する。

そこで近年の新資料を紹介しながら大和における弥生時代の青銅器文化の実態を明らかにしておきたい。

弥生時代の青銅器は、舶載青銅器と国産青銅器の二種に大きくわけることができるが、大和における舶載青銅器については、従来からその出土例は少く、明治年間に出土した御所市名柄遺跡から銅鐸と伴に出土した多鈕細文鏡が一例あるにすぎなかった。

一昨年、田原本町にある多遺跡の調査が行われたが、この遺跡は、同町にある西日本を代表する遺跡の一つである唐古・鍵遺跡の西200mの所に所在する奈良県では二番目に大きい集落遺跡であることが明らかになった。

調査成果の一つとして奈良県では初めての細形銅剣の先端部が、小さな土坑の中に埋められているのが検出された。

このことは銅剣・銅矛の分布圏外での出土である点注目されている。分析などまだ行われていないことなどから舶載であるかどうか明らかでない。

さてこれらの青銅器がいつごろ流入してきたかという点であるが、先の多鈕細文鏡は、銅鐸と伴に出土しているが、偶然の機会に見つかったもので、共伴資料として土器もないため時期をきめる資料を欠く。共伴した銅鐸は佐原真氏の銅鐸に従えば古い時期の外縁付鈕式に属するが、これだけでは確実な時期をきめがたい。一方多遺跡出土の銅剣片は、共伴資料として同じ土坑より弥生土器が検出されており、これらの土器型式から畿内第4様式から第5様式まで含まれているため、少なくとも弥生中期末から後期にかけて埋められた可能性が高い。

今後さらに舶載青銅器の出土例も予測されるが、現時点においては、少なくとも中期末乃至後期にならないと奈良県には舶載青銅器は流入していなかったのではないかと推測される。

一昨年北九州市の九州厚生年金会館において『弥生時代の青銅器とその共伴関係』に関する研究会が行われ、私も参加したのであるが、その折に近畿における舶載青銅器の流入の時期について討論が行われたが、それらをまとめると近畿全域にわたって舶載青銅器の流入の時期は、弥生中期末から後期よりさかのぼれない資料がほとんどであったことから先の推測は正しいといえよう。

次に国産青銅器であるが、弥生時代のものとして、銅鐸、巴形銅器、小形仿製鏡、銅鍬がある。中でも銅鐸が最も多く出土している。

まず銅鐸であるが、現在知られている奈良県で出土した銅鐸の数は、出土地の明らかなものとして遺跡から13個、また伝大和出土とされている出土地不明の銅鐸4個、計17個が知られている。

出土地の明らかな銅鐸の分布をみると盆地周辺の東西南北各地の丘陵部及び山間部から出土しており、盆地内に点在する弥生前期から後期にかけての集落遺跡を取り囲むような状態で出土している。

しかし近年盆地東南部に当たる平地から2ヶ所出土している。

このように銅鐸の出土地が、弥生遺跡の所在する地よりはなれた山間部、丘陵部に集中していることは他の地域と同様である。又出土している銅鐸の殆んどは明治、大正、昭和の始に偶然の機会に出土したものが多く出土状態及び共伴して出土した土器もなく、時期を明らかにする資料に乏しい。

それらの中で昭和60年に桜井市大福遺跡から出土した銅鐸は、奈良県における最初の発掘調査による出土銅鐸として注目されている。この大福遺跡は、奈良盆地東南部に位置し、桜井市大福町にあって、遺跡の範囲は東西約400m、南北450mの大規模のもので、縄文時代から鎌倉時代にかけての大集落遺跡である。調査の結果遺構として弥生時代後半の方形周溝墓2基、土坑2基、飛鳥時代の掘立柱建物2棟、土坑などが検出された。

銅鐸が出土したのは、2号方形周溝墓であり、この方形周溝墓は、周溝がほぼ東西41m、南北11.5mの方形に周溝がめぐり、西南角に幅1mの陸橋を設けている。

銅鐸が埋められていた埋納坑は、周溝墓西辺南北溝の底部にあり、長軸を西辺南北溝に平行して長径25cm、深さ18cmの長円形である。

銅鐸の埋納状態は、鈕部を南にして裾部を北にし、鐸部を上下にしてほぼ水平にして置かれていた。しかも銅鐸と埋納坑の間には、銅鐸の外側を巻いた状態で粘土を詰めて銅鐸を安定させていた。

次にこの銅鐸が埋納された時期については、この方形周溝墓築造以前あるいは、方形周溝墓築造後、周溝墓の築造と同時に三つが考えられるが、調査担当者は、銅鐸の埋納方向と周溝の方向が一致していることは偶然とはいえないとしている。

また、方形周溝墓から出土した土器の年代と銅鐸が埋納されていた土坑内より出土した土器の年代がほとんど変わらない点などからして方形周溝墓の築造時期と同時期に銅鐸が埋納されたと考えられる。

そこでこの銅鐸の出土の意義について少し述べてみると、銅鐸は従来いくつかの集落の共同祭器と一般には考えられてきたが、それが集落にとどまらず家族墓とも考えられる方形周溝墓

に伴って出土したことに大福遺跡出土銅鐸の大きな意義がある。

従来銅鐸を模倣して作られたと考えられる小銅鐸（高さ10cm程のもの）が墓に伴った例は、福岡県原田遺跡、静岡県愛野向山遺跡にみられるが、これらの小銅鐸と大福遺跡出土の大きな銅鐸とはその性格を異にするものであり、大きな銅鐸が墓に埋納された例はなく、その意味では今回の発掘調査例は大きな成果の一つと考えられる。

次に重要な点は、銅鐸が埋納された時期が明らかになった点であろう。

次に銅鐸の生産が行われていたことを示す遺跡がこの大和において一ヶ所発掘調査によって明らかになったことも青銅器に関する新しい知見を提供した。

その例は奈良県の田原本町の唐古・鍵遺跡の第3次の調査において、大量の土器・木製品に伴って、銅鐸の鑄造に関連する銅鐸の石製鑄型片、土製鑄型、フイゴ羽口、ルツボなどが出土した。出土品の中でも土製の銅鐸鑄型は全国でも他に類例がないものだけに今後の銅鐸鑄造技法を考える上にも重要な資料となる。



唐古・鍵遺跡出土 石製鑄型片



唐古・鍵遺跡 土製鑄型出土状態

出土人形の系譜

吉 田 豊

古い時期の^{にんぎょう}人形には、縄文時代の土偶、古墳時代の人物埴輪などがある。土偶や埴輪を単純に人形とよぶことはできないであろうが、土製人形の系譜的な初源と位置づけてみたい。

土偶には、女性（婦人）像であること、大陸方面で作られた旧石器時代の石製女性像、いわゆる旧石器のヴィーナスよりも後に作られるようになったものであること、故意に壊したり切り離したりしたと思われるものが多いことなど、3つほどの特徴がある。同じ女性像として、旧石器のヴィーナスとの共通性をもちつつ、縄文中期の狩猟・採集生活の一時的な向上のなかで新たに発達したものである。また、永続的に祀られる神としてではなく、ある時点で放棄されるものであり、死と再生の呪術に関係するものであったろう。

中国大陸では漢代以前から墳墓に陶製の俑が置かれるようになっており、日本の埴輪もその影響を受けていることは明らかである。この後、飛鳥から室町時代に至るまで、日本では土製の人形はほとんどみられない。本格的に作られるようになるのは、江戸中期に始まる伏見人形からである。中世の土器作りに始まり、伏見稲荷への参詣者用に様々な形のものが作り出されるようになり、江戸後期から明治にかけて、全国各地に土人形を広めていった。しかし、最近の近世都市遺跡の発掘例の増加に伴い、江戸期の土人形が京・大坂・博多などからも出土するようになり、土人形の起源についての再検討が必要となってきた。特に堺から出土する人形には、江戸前期まで遡ると思われるものもあり、注目される。堺市博物館主任研究員奥田豊氏のご教示によれば、そのなかには東南アジアの陶磁人形の影響によると思われるものがあるという。

中国では、唐代以降においても葬墓用の明器

として人物像などが作られたし、タイのサワンカロークでも、壊して埋められる陶磁人形が、13から15世紀にかけて数多く作られていた。堺出土のもので、16世紀まで遡ることが確実なものはまだ明らかではなく、墓域から出土するものでも児童が生前愛用した玩具と思われるものが多いが、素焼土製の小さな仏像などの出土例もある。初期伊万里焼に伴うものとされる「高麗人像」など17世紀初めのものも堺では出土しているが、今後15・16世紀のものが出土すれば、中国や朝鮮半島、東南アジアの明器用人形との共通点がさらに明らかになってくるものと思われる。また、埴輪のように一部支配層のためだけに作られた場合は別として、土偶とこれらの明器用土人形との間にさえ、埋められるべきものということからの類似性を認めるのも、超時代的とはいききれない部分があるのではなから



堺環濠都市遺跡（調御寺跡）出土の土人形

うか。

次に木製系の人形であるが、日本では古くから石や土よりも木を多く使い、建造物や道具などを作ってきた。人形についても、飛鳥・奈良時代以降は、紙や布を含め、木製系のものが多くなる。しかし、古墳時代以前の木製人形として知られているのは、今のところは滋賀県蒲生郡大中の湖南遺跡出土の3体の木偶であり、こ

の他には鳥型などの形象木製品が知られているのみである。

飛鳥から平安時代にかけて出土する“ひとがた”とよばれる板状の木製品は、特に平城宮跡から数多く出土している。また中世になると、広島県福山市の草戸千軒町遺跡などにみられる。これらの“ひとがた”は、時代順に正面で見る形状から側面で見るとのへと変化している。しかし最近になって、大阪市の船場（安曇寺跡）などから近世の初めころのものが出土する例もみられるが、これらの“ひとがた”をみると、中世までのヘギ板状のものから、板が厚くなったり丸い木をそのまま削ったりして、上半身を表現したものへと変化してきている。これらは通例として木偶とよばれ、“ひとがた”とは区別されるが、系譜上は同一のものと考えられる。

この木偶は、江戸中期以後の浄瑠璃（文楽）人形の頭に通じるところがあるが、形状としては大中の湖南の木偶とも似ている。くぐつによる人形まわしや東北地方で行なわれたオシラサマ人形も同様、頭部のみを表現し、胸より下が棒状に簡略化され衣服を着けたものであるが、これらはいずれも操る、まわす、振るといった動作を通じて、人間の身代り、形代としての人形に活力を促すものであった。一方、古代から中世にかけて作られた板状の“ひとがた”であるが、これには「重病受死」と墨書された、第三者をのろう気持を人形に移したと思われるものもある。しかし多くは、そこに何も記されておらず、宮跡や集落跡の河川・溝から出土しており、6月や12月の季節の変り目の大祓いなどにおいて、罪や穢を祓い流すために使われたのだとされる。しかしこれを、行為後の処理法として流すものと考えれば、季節の変り目で弱った自らの魂を活気づけるのが“ひとがた”の用途であるとすることもできる。それが神への行為と考えられれば、「祓い」は、魂を活気づけ疫病を遠ざけてくれるよう、神に供物をはらうこととされるようになる。お金を払うのと同じ意味である。

主体は、自らの願いを、なでつけたり吹きかけることにより“ひとがた”に込める行為である。そこに神観念や罪穢の意識が加わることで、行為の目的が変化してくる。後の雛人形にしても、子供の形代であるべきものが、内裏様であったり天神様となったりする。

昭和63年秋、堺市博物館で行なわれた特別展「日本の人形」では、美術工芸品や郷土玩具、考古資料のうちから、いくつかの人形を、土製系と木製系とに大別することによって歴史的に位置づけようと試みた。紙面の都合上、ここでは考古資料を中心に簡単に振りかえてみた。

土と木の人形の違いは、土製のものに土偶、埴輪など死者供儀や再生呪術との関わりがみられるのに対し、木製の方は浄化された魂や神仏の容器、依り代である。土が地上と地下を結び、木が地上から天上へ伸びるといった違いであり、象徴的にいえば、少なくとも日本においては、地下と天上にむかう精神文化の一端をそれぞれの人形たちが担ってきたということができのではなかろうか。

写真はいずれも、堺市教育委員会蔵（堺市立埋蔵文化財センター保管）の出土人形である。



堺市内出土の人形（右端は木偶）

資料室学内公開15周年回顧

角 田 芳 昭

本学考古学等資料室が学内公開されて本年で15年目を迎える。また『阡陵』も20号（毎年春秋2回発行）に達したのでこの機会に15年の歩みについて回顧してみたい。

考古学資料室は昭和29年末永雅雄先生（本学名誉教授・日本学士院会員）のご尽力と大学当局のご配慮により、図書館3階へ設けられたことに始まり、約20年間この展示室を使い考古学実習、博物館実習、その他関連する授業が行なわれた。昭和47年3月高松塚古墳壁画が本学考古学研究室と橿原考古学研究所による発掘において発見され、埋蔵文化財に対する世間の関心が高まり、本学においても「考古学資料室管理運営委員会」が発足し、資料の適正な管理運営が行なわれることになった。そして昭和49年大学院学舎が改築されるのに伴ない、基本設計の3階に1階分を増築し、その最上階へ考古学資料室を設置することが決定した。49年3月大学院学舎が改築され、7月夏休みにかかり、網干善教教授を中心とした考古学研究室の学生の応援により夏期休暇中に図書館より全資料の移転を行なった。旧本山コレクション（本山彦一元毎日新聞社長蒐収資料）の考古資料10,000余点の寄贈購入とその後の民俗資料、歴史資料など

の購入及び発掘資料等が主な資料で、この中より精選された資料2,300余点を展示室へ陳列することになった。

事務室、研究室、会議室（兼講義室）、収蔵室、展示室等に分れ、資料の学内公開も行なわれることが決定し、専任職員1名が配属され、資料の管理運営事務、資料室規程の制定にあたることになった。規程については前に「考古学資料室管理運営委員会」規程があったのでこの骨子を織込みまた民俗学、歴史学等の資料が追加されているので「関西大学考古学等資料室規程」となり考古学、民俗学、歴史学等であるという点から「等」の文字が入れられることになった。資料室の目的とするところは「考古学、歴史学及び民俗学等の資料及び図書等の収集、保管、整理、展示及び調査研究活動を行ない、大学における教育、研究の発展のために寄与する」ことであり、その為に管理運営委員会が置かれ、各専門の委員が選出された。また展示資料の公開においては毎月1回第3土曜日午後12時から16時まで公開されることになった。ただし1月、2月、7月、8月は除外されることになった。昭和50年10月1日より規程が施行され、同年12月20日（土）第1回の学内公開が行なわれた。これに先立ち前日の19日読売新聞に「関西大学が毎月1回考古学資料を公開」—土器など貴重な2,700点—の見出しで記事が掲載されている。見学者に配布されるパンフレット『関



大学院学舎（4階考古学等資料室）



旧考古学展示室（昭和50年～60年）



考古学等資料室（昭和60年改装移転）

『西大学考古学資料室概要』（A 5判 4 ツ折）を用意した（資料写真20点を収め資料の概要を説明）。当日は多数の教職員、学生が見学され、本学に考古資料が所蔵されているとは聞き及んでいたが、このような立派な資料が多量にあるとは知らなかった。じっくり見学したいなどと発言され、関係者としても努力した甲斐があったと感じた次第であり、なお一層充実した展示をしていきたいと考えている。

昭和51年度見学者数307名、52年度300名、53年度243名という統計が出ており、300名から400名の見学者で、この他に授業における見学



第2展示室（歴史・民俗・美術工芸資料展示）

者、研究者、学外見学者が訪れられているが数には入っていない。学内公開により諸々の問合せや、取材、資料の貸出し等の事務も増えたので、53年度よりアルバイト（後の定時事務職員）が増員された。ここにおいて資料室事務も一段と進み、諸々の事業計画、調査研究計画も立てられた。

先ず博物館実習教材として複製画の掛軸を購入し、指導資料の充実をはかる。同時に展示資料としても使用にたえるものとして近代の代表的画家の代表作を10数点購入した。また奈良県佐紀町出土日薬酢媛陵の「きぬがさ形埴輪」（高さ120cm・径100cm）の複製を購入した。昭和55年には『考古学資料図鑑』（昭和48年初版）



昭和51年印刷



昭和48年初版発行（55年再版）



昭和55年創刊

の再版を発行し、博物館施設、教育委員会、各大学の研究所等へ贈呈し、資料室のイメージアップに連なった。同時に考古学資料室の業務、資料紹介、調査研究報告など資料室PR誌として資料案彙報『阡陵』が5月に創刊された。目次によると、「創刊によせて“もの”を見る楽しみ」「考古学資料室概要」「神田孝平翁について」「陸奥国亀ヶ岡出土“土偶”」「54年度調査報告（青森・岩手）」「関西大学博物館（仮称）設立要望書趣旨」「資料室規程」「運営委員氏名」となっている。『阡陵』誌名の由来については横田健一先生から“阡陵”という題をいただいた。『本学の学生が愛唱する逍遙歌の一節に「名も千陵の丈夫が」とあり、大学の所在地「千里山」に因んだものである。阡は数字であるとともに「ミチ」「墓道」という意味もある。『陵』は「ヲカ」「ツカ」「ミササギ」であり、共に考古学に関連する。資料室の彙報にふさわしい標題である』と解説されている。B5判12ページで、阡陵の題字は網干善教文学部教授（現委員長）が揮毫された。2000部印刷され、全国の主要博物館、美術館施設、関係研究機関、各大学博物館学課程へ送付贈呈された。諸先生方及び本学出身で社会教育機関へ勤務されている研究者に原稿をお願いし、第2号が11月に発行された。以降毎年5月と11月の年2回発行の予算が認められ、執筆者も本学教員を中心に順調に3号以降の発行が続けられている。

本学の博物館学課程は昭和36年に開講され本年で28年を迎えるが、この間多数の学芸員資格取得者を世に送り出し、社会教育施設へ多数就職し活躍しているが、この事務や実習の補助業務も資料室で行なうことになり、暗中摸索の中にも、上司や諸先生方のご指導で楽しく業務を行うことができた。昭和51年より、この博物館学課程を開講している大学で組織している「全国大学博物館学講座協議会」へ加盟させていただき、研修会へも出席させていただいており、博物館学課程について諸々学んだ。各大学との情報交換で得た知識を本学の実習等へ積極的にとり入れ、また先生方のご指導の賜で、この頃より多数の有資格者が博物館、美術館等施設へ就職が決定している。また従来30名定員であった枠を学生の要望や、学内事情により54年度より60名とし、2コース（Aコースは考古・歴

史・民俗等に関心を持つ者、Bコースは美学・美術史関係に興味のある者）に増設された。その後各地方に文書館、公文書館が設立され、この方面の専門職員が少なく、また公文書館法も近々制定されるとのことで、これにも対応するため、59年度よりCコースとして文書、公文書に興味のある学生を指導していくこととなった。現在はこの3コースをそれぞれの専門分野の教員により指導されている。毎年11月下旬に実施する「展示実習発表会」も年々充実した展示となってきており学内関係者が多数見学されます。前述の「全国大学博物館学講座協議会」の全国大会へは51年以降毎年教育職員1名、教務職員1名が参加し研修を深めて来ています。またこの年関西地区部会も発足し龍谷大学にて部会発足研修会が行なわれ、53年度には関西大学が当番校となり9月12日（火）研修部会を開催しました。「博物館実習における諸問題点とその対策」の議題のもとに各大学の実情報告とその対策について話し合われた。その後考古学の展示室を出席者が見学された。そして55年度全国大会において関西部会の設立と規約が承認され、ここに正式に関西部会が発足し、規約により会長に本学文学部教授網干善教氏が選挙において当選され就任された。事務局は会長校へ置くことが規程にあり、本学考古学等資料室で引受けることになった。また監事として角田芳昭が指名された。昭和57年度全国大会において委員長校の交替があり、関西大学が委員長校に選出され、網干善教文学部教授が委員長に就任し、事務局も本学が引受けることになり、関西部会と同様に事務局代表を角田芳昭が引受けることになった。以降今田まで網干教授のご指導のもとに会報の発行及び全国大会の運営等に携わっている。『博物館学概説』『全博協研究紀要』（平成元年10月創刊号）の発行など学術成果も発表されております。加盟大学も平成元年9月現在で84大学の多数にのぼっております。またこの協議会の下部組織として東日本部会、前述の西日本部会（旧名称関西部会）があり、それぞれにユニークな活動が行なわれ博物館学の発展に寄与しております。

昭和56年は関西大学博物館学課程創設20周年となるので、これを記念して編文集を発行することが計画され、関係者へ執筆依頼が行なわれ

た。序文に末永雅雄先生のお言葉を頂戴し、33名の執筆者により論文、資料紹介、博物館紹介の力作が寄せられた。印刷費も認められ、本学博物館学課程の成果を結集した形で発行され、大方の好評を得た。考古、歴史、民俗、美術史学等の論文と、資料編として資料室所蔵資料概要、学芸員取得方法、博物館実習記録（昭和46年・54年度）などであり、A5判769ページの上製本である。57年5月完成発行された。これも全国の主要な博物館、美術館施設、研究所、博物館学課程開講大学へ寄贈された。展示資料の充実のため年次計画で毎年資料の充実をはかっている。購入資料としては55年度「吉野国平」作の刀剣一振を購入した。本名河内道雄氏で本学法学部出身の関西の刀匠として著名である。56年には北村昭斉作「黒漆瑠璃螺鈿合子」を購入した。57年には福岡県都府楼出土「鬼瓦」の複製資料を購入した。59年度は漢代の明器「緑釉猪圈」（高18cm）を購入した。60年度においては「赤膚焼茶碗」「くらわんか茶碗」「高松塚古墳壁画写真」（実寸大）8点を購入展示している。寄贈された資料としては昭和51年に工学部教授山田幸一先生より慈照寺東求堂模型1点、55年に当時の財務局長北岡栄一氏より「軍刀」（2尺3寸）1振、57年横田健一先



弥生土器（大阪府藤井寺市国府遺跡）



弥生土器（大阪府藤井寺市国府遺跡）



鶏形埴輪（愛媛県喜多郡南久米村出土）



玦状耳飾（大阪府藤井寺市国府遺跡）



縄文土器（国府遺跡出土）



鹿角刀装具（福岡県糸島郡前原町雷山）

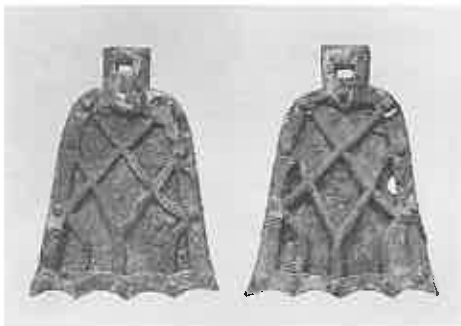


石枕（奈良県天理市渋谷出土）

生より「銅族（伝大宰府出土）2点、58年末永雅雄先生より鋏形胃2領などの寄贈を受けた。その後も資料室を見学された方々や、学生のご父兄の資料寄贈が続いた。60年ウシャブティ人形（エジプト考古資料）3点を加藤一朗先生（文学部教授）より寄贈を受け、翌年もイラン土器片（テペ・シャルク先史遺跡出土）10点を同教授より再度寄贈を受けた。同62年3月縄文土器、韓式土器、高麗青磁、茶碗等32点を愛知県在住の校友松廣寿永氏より寄贈を受けた。62



銅製壺鍙（関東地方出土）



金銅製杏葉（出土地不明）

年にはルリスタン青銅器（イラン高原ルリスタン地方出土）2点を校友椎尾晋太郎氏より寄贈された。学生の研究資料にと大阪市平野区在住の馬野繁蔵氏よりは瓜破遺跡採集資料の弥生土器を多数寄贈を受け現在整理中であり、紀要へもその整理状況をレポートしている。また「瓦経」2点を御子息の馬野和繁氏より寄贈されており、紹介記事を網干教授が16号に執筆されている。

「開かれた大学」構想の一環として、考古学等資料室の一般公開と、併せて公開講演会が昭和58年10月24日から30日まで行なわれ、好評を博した。翌年の59年10月に第2回の一般公開と講演会が行なわれ、東は東京より西は高松方面からの見学者があり、熱心に見学され、早く一般公開してほしいとの声が多かった。

昭和58年度事業計画で紀要の発行が具体化し予算もつき、創刊されることになった。編集委員会が発足し、執筆規定が制定された。それに伴ない、執筆依頼が行なわれ、創刊号には充実した誌面で7編の論文や資料紹介、そして、資料室概要、博物館学課程等が収録されており、59年3月発行された（B5判133ページ）60年3月には第2号が発行され、10編の論文、資料紹介等があり200ページに達している。以降毎年、年度末に発行され、現在まで6号が発行されている。博物館施設、大学関係、研究所等へ寄贈され、本学の研究成果を問うと同時に、歴史、民俗、美術等の論文も発表されており巾広いユニークな紀要である。

昭和60年夏旧図書館が改装され、人権問題研究室、東西学術研究所とともに引越してきた。

「簡文館」と命名され、前記2施設と保存図書を収蔵する図書館が使用することになった。第1展示室（262㎡）、第2展示室（353㎡）特別展示室（30㎡）と事務室、実習室、そして収蔵庫（920㎡）などであり、使用面積は約2,000㎡余である。第1展示室は約1200点の考古資料が展示されており、重要文化財16点も展示している。第2展示室には歴史、民俗、美術工芸資料約500点を展示しており、著名な資料として末永雅雄先生ご寄贈の甲冑復原資料、長門、山城の和同開珎の鑄造に使用した鑄型、フィゴ、ルツボなどがあり、また制札資料も展示している。特別展示室においては現在、100周年記念事業として行なったインドの「祇園精舎」の発掘状

況の写真パネルを展示解説している。この展示室において関連する科目の授業や、考古学実習、博物館実習、あるいは資料研究が行なわれており、教育と研究に寄与している。

最後に所蔵資料の概要を紹介しておきたい。

『阡陵』19号までに若干の資料の紹介を行ってきたが、これらを含めて、その大部分が考古資料であり、学術的に貴重な資料を多量に所蔵する。大阪府藤井寺市国府遺跡出土の縄文土器、玦状耳飾、弥生土器、銅鏃5点を含め15点が重要文化財に指定されている。また元治元年6月、天理市柳本町渋谷で出土した「石枕」も景行天皇陵出土とされ、これも重要文化財の指定を受けている。文化財保護法制定前の旧法令における重要美術品指定資料として愛媛県新居郡荻生村出土「平形銅剣」（1点）四条畷市出土「袈裟褌文銅鐙」（2点）愛媛県喜多郡南久米村出土「鶏形埴輪」（1点）福岡県糸島郡前原町雷山古墳出土「鹿角製刀装具」（3点）関東地方出土「銅製壺鑑」（1双）福岡県八女市吉田村出土「石人頭部」（1点）同地出土「石靱上半部」（1点）山口県豊浦郡長府町出土「和同開珎鑄銭資料」（一括）の11件であり、多くの著書に引用されている。その他縄文時代資料として岩手県下出土の土器、骨角器等や、茨城県の椎塚貝塚資料、岡山県津雲貝塚の土器、貝輪等を所蔵する。弥生時代資料として兵庫県加茂遺跡出土資料、奈良県田原本唐古、新沢遺跡資料及び岡山県津島、福岡県三潞遺跡等の資料もある。古墳出土資料として北玉山古墳出土一括資料、石製品、埴輪、金銅馬具資料がある。須恵器は諸々の器形がそろっている。特に末永雅雄先生ご寄贈の甲冑の復原資料は他にみられない貴重なものであり、多くの研究者が参考資料にと見学されている。歴史時代資料として鏡鑑、瓦、泥塔、瓦経、制札資料がある。海外資料では朝鮮半島新羅地方の土器、石器、鉄器の他に中国商代の銅器、刻字甲骨、銅戈、漢代の明器、唐代の馬俑など所蔵する。また龍門石窟の金石文拓本資料約800点もある。これらの資料の出土地の調査研究を行ない、『阡陵』や『資料室紀要』にその成果を発表している。

今後は博物館相当施設として登録され、一般公開される日が一日も早いことを祈るものである。



中央アンデス地帯出土「チャビン土器」



三角板革綴衝角付冑
鉄横矧板鉄留短甲（末永雅雄先生寄贈）

資料利用状況

平成元年 6月21日から 9月23日まで
大阪狭山市郷土資料館「考古学少年」展へ

貸 出 物 件 名	点数	備 考
画文帯神獸鏡	1 面	(複製) 和泉市黄金塚古墳出土品
柄頭刀身	1 口	銅象嵌円頭大刀
勾玉・碧玉管玉(メノウ製・碧玉製)	1 括	隠岐島西郷町飯ノ山横穴出土品
円筒埴輪	1 点	堺市西陶器村土山出土品
人物埴輪	1 点	群馬県佐波郡東村出土品
家形埴輪	1 点	(複製)
眉庇付冑・桂甲装具	1 式	末永先生復元甲冑
ビテカントローブス人	1 点	復元人骨想像復旧像
ハイデルベルグ人	1 点	※
ネアンデルタール人	1 点	※
クロマニオン人	1 点	※
縄文人頭骨	1 点	復元藤井寺市国府遺跡出土
弥生土器	2 点	藤井寺市国府遺跡出土器

平成元年 8月21日～9月2日
大阪市文化財協会「10周年記念」展へ

- 鉄三角板革綴衝角付冑
鉄横剗板鋳留短甲、頸鎧、肩鎧、籠手、手甲
1 具
- 鉄鋳留短甲(復元品) 1 点(復元品)
- 鉄鋳留衝角付冑(復元品) 1 点

平成元年10月6日～10月18日
三越倉敷店「再現藤ノ木古墳展」へ

- 金冠(模造) 長野県桜ヶ丘古墳出土 1 点
- 金銅製釧 2 点
- 金銅製圭頭大刀装具 3 点 1 具
- 金銅製獅嚙式環頭大刀柄頭 1 点
- 銀象嵌文円頭柄頭 1 点
- 金銅製鞍金具(前橋・後橋) 1 具
- 金銅製鈴 4 点
- 鉄地金銅張鐘形杏葉 4 点
- 鉄地金銅張轡・鏡板 1 点
- 復元挂甲装具 1 式

編集後記

『阡陵』が昭和55年5月に創刊されて以来10年目を迎え、ここに20号に達しました。この間多くの諸先生方、上司、同僚のご指導ご協力を得て編集に携ることができ、また諸先生方、博物館美術館等施設へ勤務の方々より、原稿をいただき、充実した誌面となり今日まで続いたことを感謝申し上げます。

本号にも横田、網干、加藤、松浦の諸先生方と橿原考古学研究所博物館の久野邦雄氏、堺市博物館の吉田豊氏にも玉稿をいただきました。ここに感謝申し上げます。

この10年間に考古学上における発掘発見には多くの著名な見るべきものもあり、中でも藤ノ木古墳、吉野ヶ里遺跡の発掘には日本国中の人々の目をひきつけました。また本学100周年記念事業における「祇園精舎」の発掘においても多量の遺物や遺構を発見し、祇園精舎遺跡と断定されるに至ったことは素晴らしい成果であったと思います。

しい成果であったと思います。学術報告書の出版が期待されます。資料室においても一般公開へ向けて着々と準備しており、近い将来博物館担当施設として公開されることでありましょう。学内関係者の一層のご指導ご協力をお願いするものであります。また『阡陵』も誌面の充実をはかっていきたい所存です。で、こちらをご指導のほどお願いいたします。

表紙の「銅鐸」は大阪府四条畷市より出土したもので、弥生時代の袈裟襷文銅鐸であり、総高42.3cm 裾長径22.6cmで、縦3条、横4条の斜格子で6区画にされている。本誌第5号銅鐸と親子であり、この銅鐸が一まわり大きい。近年の発掘で鋳型等も発見されています。機能については未だ結論に至っておらず、宝器説と祭器説があります。また宗教儀礼にも結びつけられています。

【角田 芳昭】